

論文審査結果の要旨

論文提出者氏名 巖麗京

本論文（近代日本における「神道」の変容——神道をめぐる諸言説とその流れ）は、明治より昭和初年までの日本で、近代神道がどのように形成され変化したかを、おおくの資料によって明らかにしたものである。論文では、「神道」を、制度と思想——国家・行政側の制度・政策と、宗教人たちの思想・意見表明との交錯においてとらえている。

第一部では、明治初期の国教化の運動が挫折し、「神道非宗教」論が形成される過程を扱う。神道のもつ広い意味での宗教的機能のうち、信仰（狭義の宗教）が民間および下位の神社・教派神道に、政治（および教育）が公的機関に委ねられることで、それ以外に局限された公的祭祀が神道の本質として非宗教化される。そのプロセスを、第1章では仏教者、第2章では神道人の言説を追いながら、丁寧に描き出す。

第二部では、第3章で、明治15年以後、国家の官僚制と憲法・教育勅語の成立に向けて、政治および教育が神道の領分でなくなっていく過程を描く。第4章では、憲法成立後、キリスト教との関連でイデオロギー的空洞が意識されたことを指摘し、第5章では、神社整理が国家意志を下から支えるようにして行われたことを明らかにする。

第三部では、第6章で、明治末年より、社会問題の発生にも相応じながら、神道を主体的・道徳的なものとして立て直す動きが生まれたことを、川面凡児の神道思想と実践を例に描いている。第7章では、さらに、有力な神道人たちにより、神道の社会化を図る動きが出てくるとともに、神道の民衆化・個々人の生活習慣への浸透が立ち上がって来たことを述べ、あわせてこれに対する、仏教側からの抵抗の動きをとらえる。仏教の抵抗は、あくまでも国家に対する神道非宗教堅持を要請する

規範論に過ぎなかったことを指摘する。第8章では、神社問題調査会の審議記録をもとに、国民精神作興の動きとも連動しながら、神社が個々人の生活世界に広がるとともに、その能動性を調達するようになって、一種の実質的な神道国教化の段階に達しており、昭和初年には、神道が席卷する後の戦時期の下地が作られていたことを指摘する。

以上のような議論は、いずれも新たに得られたものを含む各種の資料を博搜して堅実な調査と推論の展開によって行われており、その資料操作・議論展開に力があり、あらたに明らかにされた数多の知見があることが、まず高く評価された。さらに、研究史的意義として、本論文は、神道を主導する諸主体が、国家から保護を得ないにもかかわらず、それゆえいっそう下から神道を社会化していく動きと力を担っていったという屈折した経過を歴史的・構造的に明らかにしている。この点は、従来の制度派神道論に依拠しながらもその敷居を乗り越え、また従来の国家神道論の概括論的な不十分さを具体的レベルで充填しており、高く評価できる。

他方、言説分析に拠っているにもかかわらず、発言者の範囲、そのコンテクスト等についての分析が不足である点、議論が宗教史をたどる形で行われており、その時代の政治・社会への目配りが不足していることなどの問題点が残る。また、神道論としては、祭祀や教育・メディアへの展開、社会的勢力等についての具体的な調査や裏付け等をもっと行なう必要がある。ただ、そのような視野の狭さがあるにもかかわらず、全体としては、扱った問題を、きわめてねばり強く追っていく力量と意志、また外国人（中国人）にして、近代神道に対して安易にレッテルを貼ることなく、その内実に深く学問的に踏み込んでいく態度は、多くの審査委員が感心するところであった。

本論文は、近代日本の諸宗教・政治・思想・社会の中における神道というきわめて重要でまた困難な問題に果敢に取り組んで、その歴史的動態を明らかにした研究として、高く評価できる。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認める。

最終試験の結果の要旨

本審査委員会は、平成15年2月23日に論文提出者に対し、学位請求論文の内容および専攻分野に関する学識について口頭による試験を行った。

その結果、論文提出者は博士（学術）の学位を受けるにふさわしい十分な学識を有するものと認め、審査委員全員により合格とした。